

2004年9～10月掲載分

- 横浜 川田 田鶴子
爽やかに朝の挨拶山の子等
人希な古道に愛し草の花
風化佛半ば野菊にかくされて
山祇に椽の実はねて転げ落つ
大寺に声を落として鳥渡る
- 十勝 高田 峙鳥
カナ赤少年の日の夢ひとつ
秋晴や日に飲み会二つあり
新しきジーンズ心地よき花野
空耳にあらす邯鄲また鳴きぬ
峠おり野菊親しき十勝かな
いよいよに嶺々澄みにけり十勝晴
真つ向に十勝嶺々おき蕎麦を刈る
露けしや馬の嘶き遙かより
存分に老の仕事や秋没日
明日のこと明日に任せて温め酒
- 習志野 大慈弥 爽子
ゆたかなる森豊かなる法師蝉
なほ奥へ咲き初む萩をかきわけて
木の実落つ森に光陰深まれる
秋の蚊の標的となりゐたるかな
濁りたる池に蜻蛉の空ひらけ
- 相模原 西沢 桃園
「十勝旅情」
白樺のみどりに十勝の風旨し
見晴るかす男爵薯の花白し
えどにうや象の化石の出たところ
ムックリの哀しき調べ秋の暮
はなますの襟裳岬の岩に這ふ
- 十勝 西川 勝仙
万開に蛇口をひねる残暑かな
残暑なほ衰へ見せぬ十勝かな
老兵の思い出語る敗戦忌
十勝野に活気溢るる麦の秋
- 町田 小森 正彦
お遍路を包み込んで薄紅葉
曼珠沙華甥の語りし医師の言
溪谷に花火の音の一つつつ
かなかなに取り囲まれて露天の湯
お宮松に人影のなく秋時雨
今日伸びし葛にかがみて遊歩道
虫の音の止みし場所から球拾う
- 相模原 後藤 慶
大文字草大の文字にも大小あり
風生れて大の字揺るぐ大文字草
新涼の梢を渡る風の声
画廊出てそぞろ歩きの夜の秋
電子手帳贈らる母の夜学かな
- 町田 一ノ瀬 公儀
潮騒と花火の音のシンフォニー

2004年11～12月掲載分

- 相模原 後藤 慶
秋の日をいただく車椅子日和
やゝ寒く真昼の湯浴母に添ふ
見に入むや我が行く末を母に見て
秋風やかくも生かされしてふ母に
老ゆる母時共にして秋の暮
- 横浜 川田 田鶴子
石菫の花ほろほろ鳥の遊ぶ園
迷い犬帰路に付き来て夕時雨
海浜の帽子等見せ爐辺話
教へ子のサンタ見破ぶりクリスマス
ボランティアの餅搗ぎに行く親子して
- 十勝 高田 峙鳥
きつぱりと秋雨あがる朝かな
ペダル踏み金風のふるさとを行く
龍壺庵(行々子宅)三句
庭句碑に宮城野萩のしだれけり
豊饒と旅を語るや秋彼岸
爽やかに鷗立庵の句座のこと
又きびす返すや秋の絵画展
二十年ぶり黒々と山葡萄
雲払ひ小望の月の皓々と
お目見えのごと東の間のけふの月
百の鉢悔ひなく育て九月尽
- 十勝 西川 勝仙
果てしなき広き十勝の秋の空
大牧の日高大地の馬肥ゆる
秋夕焼美しく聳ゆる日高峰
売れ残る造成宅地の秋の草
縄のれんくぐりて新酒2, 3本
長き夜やナース呼ぶベル又ひとつ
点滴をひとり見つめる夜長かな
老いたとて生きる仕合せさわやかに
- 町田 小森 正彦
流れ出る翡翠の川の涸れており
走り来て一茶の里や雪深し
神の旅神頼み控かへひと月や
神迎なにか元気の戻り来て
三の酉ここだけ暑し熊手買ふ
太陽に勝ちているよな冬帝よ
- 町田 一ノ瀬 公儀
落日に頭下げおり枯れ尾花
- 習志野 大慈弥 爽子
掃くもよし掃かざるもまた銀杏散る
初冬の研ぎ澄まされし雲の色
冬ぬくしほんの気持といふことば
電飾の点滅街の十二月
年用意せねば俳句をつくらねば